



少女蔵



川崎ゆきお

古い農家がまだ残っている田舎の町を高橋は歩いている。メイン通りから外れた旧道は映画のロケにでも使えそうだ。ただ、電柱やエアコンなどが普通にある。町並み保存をやるほどの規模ではないのだろう。

農家の母屋は奥まったところにあるが、蔵は道沿いにある。

蔵には小さな窓がある。銅板を張り付けた扉があり、それが左右に開いている。格子が詰められているので忍び込めないが、中からも出られない。

その窓に人影が見える。おかつぱの女の子だ。胸あたりまで見える。着物は真っ赤だ。

「高橋君だね」

市松人形の後ろに男の顔がある。そして、人形が男に変わる。

「三田村さんですか」

「ここです。ここです。これが私の蔵です」

「何処から入れます」

「蔵の左側の土塀に木戸があります。そこから庭に出ますから」

高橋は言われたように庭に出て、そして蔵の前に立った。

蔵の分厚い扉が開き、三田村が高橋を招き入れる。

「二階は市松さんの部屋です。私は一階に住んでいます」

「噂には聞いていましたが、いいですねえ。ここが少女蔵ですね」

「あの人形はこの蔵に元々あったのです」

「なるほど」

「譲り受けました。いいでしょ。たまに外を見せています。まあ、人形が外を見たいと言うわけじゃありません。たまに人が通るのです。そんなとき、そっと窓に置きます」

「それは悪い冗談ですね」

「いえいえ、気付かない人の方が多いですよ。この辺の人は見飽きた風景ですからね。いちいち蔵の窓なんて見てませんよ」

「しかし、評判になりましたねえ」

「この辺りは観光地じゃないのですが、知ってる人はよく知っている穴場なんですよ。結構古い農家なんかが残ってます。知っている人だけが何となく寄る場所です。奥まっているので見付けにくいのですが」

そういう人が噂を流したようだ。赤い着物を着たおかつぱの少女が蔵から外を見ている。軟禁されているらしいので助けに行かなくては……と。

ただ、誰も本気で、そう思っていないのだが。

リアルに考えている人は、人形師が農家を作業場に使っているのだろう程度だ。常識の範囲内で。

ただ、この三田村という男は蔵マニアで、蔵に住むのが好きなようだ。しかし、長くは同じ蔵には住まない。今も次に借りる蔵を持ち主と交渉中だ。

「ここは長いのですか」

「もう半年になります。そろそろですねえ。まあ、蔵の窓から市松さんも、もう、そろそろです

」

「そうですねえ。あまり引っ張るとまずいですからねえ」

「今はそれほど噂は広まっていますが、増えつつあります。だからその前に……」

「なるほど、引き際が大切なんですね」

高橋もネットで写真を見て、訪ねて来たのだ。

帰り際、二階に案内され、市松人形を見せてもらった。思ったより汚れていた。着物も虫食いが多。

「怖いですねえ。やはりこういう古い人形は」

「たまに自分で窓へ行き、外を覗いていますよ」

「え」

「冗談です。冗談。でもありそうな気配がします」

「本当にそうなら、怖いですねえ」

「はい、そうなりそうなので、このあたりで打ち切ろうと思ったのです」

「そうですねえ。古い人形は怖いですから」

「おっしゃる通りです」

了